

「キリストが我が内に」

創世記18：9～15、ガラテヤ2：20～21

誰もが満たされた人生を送りたいと願っています。しかし実際はそれがとても難しいのです。若い頃は、仕事も趣味も充実していたでしょう。けれども年をとるとそういうことはだんだんできなくなります。あるいは病気をして、失敗や挫折を経験して、自分で自分の人生を満たせなくなる時が来ます。創世記に年老いたアブラハムとサラにイサクが与えられる話がありますが、その時にサラは「自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなく」（18：12）と呟きました。年をとるとだんだん楽しみもなくなり、気力も体力もなくなって、もはや自分では自分の人生を満たすことができなくなる。何か社会の周辺に追いやられていくように感じて寂しさや虚しさを感じる人も多いでしょう。その時にどうするか。何をもちつて自分の人生を満たせばよいのか。

アブラハムとサラにはイサクが与えられました。イサクの誕生、それは年老いたアブラハムとサラにはまったく不可能なことでした。自分たちには楽しみも何もない。何もできない。でも、その時こそ神さまの恵みが注がれる時でした。神さまの恵みでアブラハムとサラの人生は満たされました。それがイサクの誕生です。パウロが「わたしは弱いときにこそ強い」（Ⅱコリント12：10）と言つた信仰がここにあります。そして、このことはただ頭の中で考えることではなくて、わたしたちが洗礼を受けてイエスさまに結ばれて生きる時に、そのことを実感するようになります。

今日は、ガラテヤの信徒への手紙第2章20、21節が与えられました。ここにパウロの一番伝えたいことがあります。それが「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられる」（20節）という部分です。わたしたちは何に満たされるのか。自分で自分を満たすのか。そうではありません。イエスさまに満たされる。そこにわたしたちの信仰の目的があります。

パウロは、自分が何によって今生きているか、そのことを冷静に見つめています。自分が生きる根拠、それは「わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰による」（20節）というのです。ここをもう少し掘り下げていきますと、この「神の子に対する信仰」という部分は、「神の子の真実」と新しい聖書協会共同訳聖書は訳しています。もちろん新共同訳聖書のように「神の子に対する信仰」と訳すこともできます。そうなると信仰はイエスさまに対するわたしの信仰という理解になります。しかしここは「神の子の信仰」「神の子の真実」と訳することができるのです。

信仰とは、わたしの信仰なのか、イエスさまの信仰なのか。ここは信仰を考える時に非常な重要なところです。信仰というと、わたしたちは自分の中に湧き起こる「わたしの信仰」と理解するでしょう。でも果たしてそうでしょうか。そのような風が吹けば飛んでしまうような不確かな「わたしの信仰」が救いを可能にするのでしょうか。むしろ信仰は、このわたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子の真実なのではないか。その真実でわたしが満たされていく。自分で自分を満たすのではない。信仰は、イエスさまの真実で満たされるという体験なのではないでしょうか。

これはパウロの実体験でもあります。ダマスコ途上での回心の出来事を思い起こします。パウロの中には、イエスさまに対する信仰も愛のかけらもありませんでした。それどころか教会を迫害していたのです。でもそのパウロを神さまは選ばれました。それはまさに恵みであります。つまり自分の中には何もない。神さまに敵対し迫害するわたしのためにイエスさまは十字架でその身を献げてくださった。そのイエスさまの愛、真実だけがあるのです。そのことをパウロは知りました。

わたしたちは自分で自分を満たそうとしているのではないのでしょうか。信仰もそのように考えている。自分の強い信仰によって善い行いをして自分を磨いて充実した人生にしたい。信仰の主体がどこまでも「わたし」なのです。先々週、逢坂の言葉を引用しましたが、彼は次のように述べています。「今日のプロテスタントは人の側から信じている。人間論が土台であって、キリスト論に立とうとしない。しかし信仰の主体は我々ではなく、キリストご自身であらねばならぬ」ここが重要なのです。もし自分で自分を満たすのであれば、何のためにキリストが十字架で死んでくださったのか。パウロが「キリストの死が無意味になってしまいます」（21節）と言うとおりです。イエスさまは、それこそ何もない、何もできない、信仰すらない空っぽのわたしたちだからこそ、わたしのためにその身を献げられたのです。この空っぽな土の器に愛を注ぎ尽くしてくださったのです。

先週は、宮崎中部教会の創立百周年の礼拝に招かれました。百周年ですから当然、戦争の時代をとおられます。宮崎中部教会の『70周年記念誌』の年表を眺めておりましたら、実に驚くべきことが記されていました。1943年（昭和18年）戦争がいよいよ激しくなっている時に、「礼拝時に国民儀礼を行うよう通達を受けるが断った」「町内婦人会より会堂借用の願い出があつたが断った」と書かれている。それこそ敵国の宗教と揶揄されていた時代です。その時に、これを断る勇氣は想像も及びません。国全体がそういう空気に包まれていた。同調圧力のようなものがある中で、それを断るのは相当な葛藤、戦いがあつたと思います。実は、わたしたちの教会では、当時、国民儀礼を行なっていたのです。驚いたのは、そのような過酷な時代の中、1941年（昭和16年）から1945年（昭和20年）のわずか五年ほどの間に26名もの受洗者が与えられているという事実です。戦争でボロボロに傷ついていく中で、何もかも失っていく中で、でもそこに神さまの恵みが注がれている、恵みで満たされている。この時の受洗者は何よりその証しではないでしょうか。

わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子の真実で満たされること。それが信仰です。それは自分がなくなってしまうのではなく、イエスさまの真実で満たされた時に、本当の自分が始まる。神さまに喜ばれる人生がそこから始まります。

天の父よ。自分で自分の人生を満ちそうとする誘惑から自由にしてください。ただわたしたちのために身を献げられたイエスさまの真実で満ちしてください。そこに信仰があることに気づかせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。